

紀 要

第 11 号

目 次

序

- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (瀬 口 眞 司)
—地域の検討1. 湖東北部地域—
- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (小 島 孝 修)
—地域の検討2. 湖東南部地域—
- 櫛の造形 —縄文時代の竖櫛—…………… (中 川 正 人)
- 滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描…………… (田井中 洋 介)
- 今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例…………… (横 田 洋 三)
- 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域…………… (細 川 修 平)
- 長浜市石田町所在の石棺について…………… (北 原 治)
- 観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例…………… (辻川哲朗・山中 繁)
—蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査—
- 蒲生郡の渡来氏族とその文化…………… (大 橋 信 彌)
- 草津市笠山古窯出土遺物の紹介 (続) …………… (畑 中 英 二)
—窯詰めの方法の復元について—
- 森瓦窯再考 —「田原道をめぐる二つの地域」補遺—…………… (重 岡 卓)
- 近江式装飾文よりみた小形板碑の年代…………… (兼 康 保 明)

1 9 9 8 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描

田井中 洋 介

1. はじめに







石鏃は縄文時代から弥生時代の遺跡において、一般的に出土する遺物である。主に西日本においては弥生時代に石鏃が大型化し、狩猟用の道具から戦闘用の武器へと性格を変えていくことは、佐原真などによって明らかにされている(文献1)。近年には松木武彦によって畿内、瀬戸内中部、伊勢湾沿岸といった地域における打製石鏃の地域色が明らかにされるなど(文献5)、弥生時代における戦闘の実態が明らかにされてきている。本稿では諸先学の研究成果を参考にしながら、滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷を概観しようと試みるものである。

滋賀県における弥生時代の石鏃についての研究は、帰属時期を特定できる良好な報告例が乏しいために十分に行われてきたとは言い難い。その中で、進藤武は弥生時代の石器の消長について論じた際に近江における打製石鏃の変遷について、中期後葉以降は大型化して平基・凹基無茎式が一般的であり、次いで凸基無茎式、凹基無茎式、凸基有茎式があると述べている(文献6)。また、凸基式鏃は畿内に比べて出土が少なく、後期に入ってからのもので多い傾向が認められるとする。そのほか、村田幸子が大阪府、愛知県、岡山県と滋賀県の石鏃とを比較して、縄文時代から弥生時代前期にかけての石鏃の形態の地域差について述べた研究などがある(文献7)。

ところで、近畿地方における弥生時代の石鏃の中で、かつて佐原真によって指摘されているとおり(文献2)、畿内北部を特徴づける石器の1つとして磨製石鏃があり、滋賀県においても磨製石鏃を出土する遺跡は多い。滋賀県において弥生時代の石鏃の変遷を見る場合には、打製石鏃と並んで磨製石鏃の変遷についても述べる必要がある。本稿では、弥生時代における石鏃の大型化の実態や、打製石鏃から磨製石鏃への変遷過程などに着目して石鏃の変遷を見ていきたい。

なお、本稿で用いる石鏃の分類形式は松木武彦

(文献5)や村田幸子(文献7)の分類を参考にしつつ、第1図に示したとおり基部の形状によって凹基Ⅰ式、凹基Ⅱ式、平基式、凸基Ⅰ式、凸基Ⅱ式、有茎式の6種類とする。凹基Ⅰ式は基部の抉りが深く明瞭なもの、凹基Ⅱ式は抉りが浅くて不明瞭なものとし、両者の境界は抉りの深さが全長の10%に達しているか否かを指標とする。凸基Ⅰ式と凸基Ⅱ式の境界は、最大幅の箇所が全長の2/3より後ろにあるか否かを目安にする。凸基Ⅰ式は円基式と称されるものの多くを含むが、分類の指標が異なるために必ずしも対応しない。また、石鏃の大型化の指標としては、佐原真が設定した重量2g、全長3cmの数値(文献1)を基準として大型鏃と小型鏃とに区分するものとした。

		
凹基Ⅰ式	凹基Ⅱ式	平基式
		
凸基Ⅰ式	凸基Ⅱ式	有茎式

第1図 石鏃の形式分類

2. 縄文時代晩期から弥生時代前期の状況

弥生時代の石鏃について述べるにあたって、これに先行する縄文時代晩期の状況から見ていきたい。

国鉄湖西線建設に伴う大津市滋賀里遺跡などの発掘調査においては、1000点を超える打製石鏃が出土

したと報告されている(文献25)。出土層位から縄文時代晩期に帰属すると判断されるものの中で、報告書の記述によれば凹基式のもの80%以上を占める。図示された石鏃を見る限りでは、凹基式の中でも凹基Ⅱ式のもの大部分である。また、凹基式の石鏃の重量平均は1g程度と小型品である。一方、円基式・尖基式と報告されているものは重量の平均値で見ると2gを超え、大型のものが主体を成すようである。本稿における分類では凸基Ⅰ式・Ⅱ式に大型のものが目立つということになる。

蒲生町麻生遺跡では、晩期末の船橋式並行期頃のものと考えられる凸帯文土器群に伴って、7点の石鏃が出土している(文献33)。鏃の基部を欠損したのものもあるが、型式の判明するものは凹基Ⅰ・Ⅱ式と平基式である。長さ1.5~2.6cmを測り、いずれも小型のものである。

次に、弥生時代前期の状況を見てみたいが、残念ながら弥生時代前期に時期を特定できる石鏃の資料は極めて乏しい。長浜市川崎遺跡は湖北地域における弥生時代前期の遺跡として著名であり、国道8号線バイパス工事に伴う発掘調査においては、7点の石鏃が出土している(文献23)。明確な遺構からの出土ではなく、石鏃の帰属時期に疑問の余地はあるが、周辺で主体的に出土している土器は弥生時代前期のものであることから、当該時期に属する可能性が高い資料と考えておきたい。形状は細長い三角形を呈するものが主体であり、基部の形態が判明する6点は平基式と凹基Ⅱ式が2点ずつ、有茎式1点、未製品のようにいびつに突出するものが1点である。平基式1点といびつなもの1点は復元長で3cmを超えるが、石鏃の重量は報告書に記載が無く不明である。

甲良町尼子遺跡のT38においては、縄文時代晩期末(長原式)~弥生時代前期の遺物と考えられる石鏃が2点出土している(文献40)。竪穴住居JSH1出土のものは重量0.5gの平基式、土坑JSK1出土のものは0.7gの凹基Ⅰ式である。

以上のように、縄文時代晩期から弥生時代前期については資料不足ではあるが、凹基Ⅰ・Ⅱ式や平基式の小型鏃が主体を占める中で、少量の大型鏃が含まれる状況のようである。

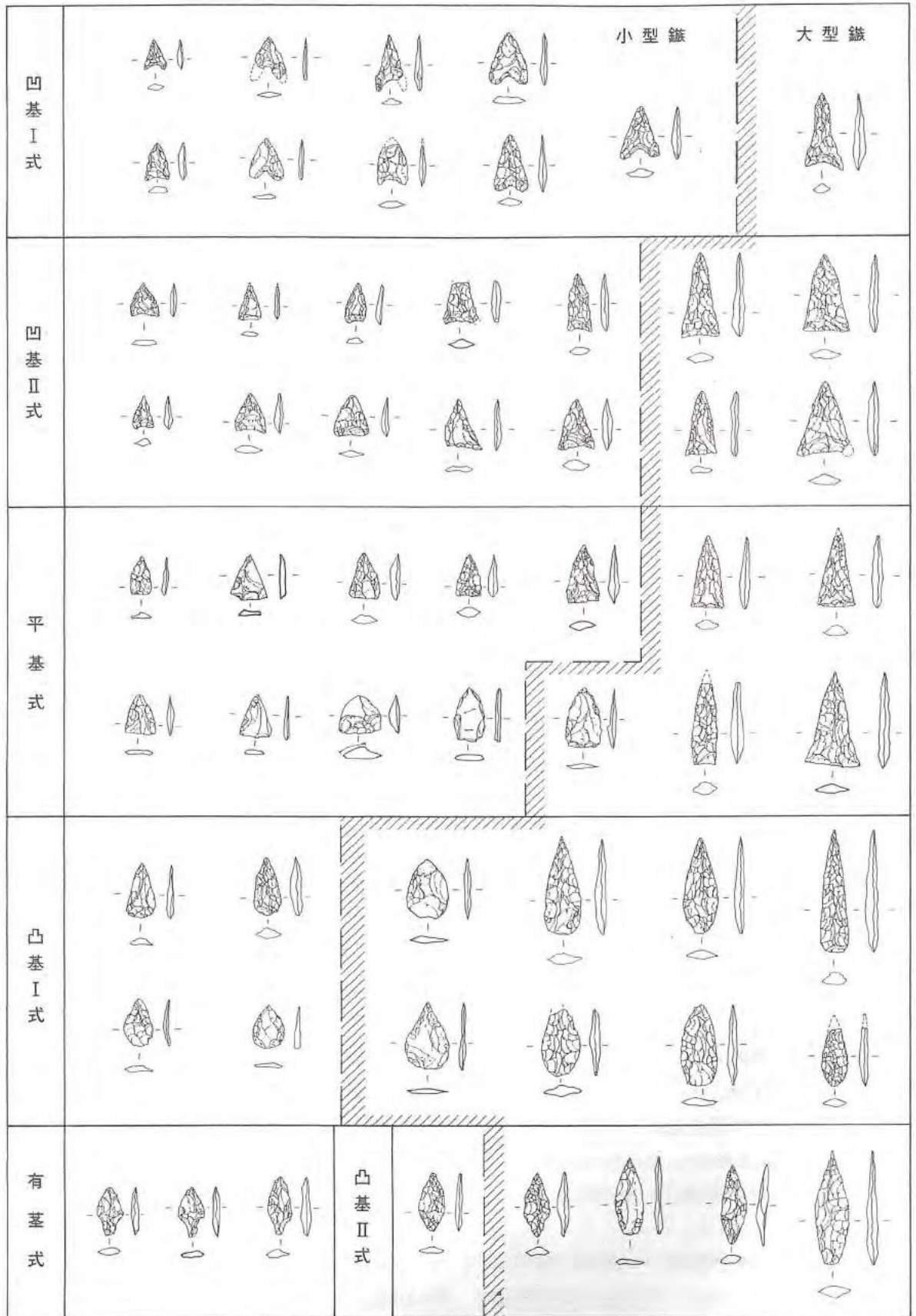
3. 弥生時代中期の打製石鏃

弥生時代中期前葉を中心とする遺跡である安土町大中の湖南遺跡の発掘調査においては、100点近い石鏃が出土したとされる(文献22)。近年、当遺跡出土の石器が資料紹介され、その報文では未製品を含めて打製石鏃58点が紹介されている(文献8)。磨製石鏃も1点出土しているとされるが、不明確である。石鏃の重量については残念ながら報告されていないが、実測図に基づいて再分類を行い、傾向を見ていきたい。

有茎式のもの58点の中に3点のみであり、これらはいずれも長さ3cm以下で大型品とは言えないものである。報文にもあるとおり、やや不整形である印象を受け、有茎鏃製作技術の未熟さを感じさせる。凹基式と見なされる24点の中には、凹部が明確な凹基Ⅰ式と不明確な凹基Ⅱ式を含むが、凹基Ⅰ式については五角形鏃の系譜を引くと思われる長細い1点を除いては3cm以下の長さにおさまり、小型品と見なされるものがほとんどである。これに対して、凹基Ⅱ式においては3cmを超える大型鏃が4点認められる。平基式の14点の中には大型のものが5点存在し、大型鏃の比率は凹基Ⅱ式に近い。また、凸基Ⅰ式12点の中で大型鏃に含まれるものは8点で2/3を占め、凸基Ⅱ式の石鏃5点中4点が大型鏃である。

大中の湖南遺跡における遺物の出土状況の詳細は不明であり石鏃の帰属時期は明確でないが、弥生時代中期前葉を中心に前期から中期中葉ぐらいの時期幅を持った遺物群と考えておきたい。当遺跡の資料を見る限りでは、弥生時代中期中葉頃までには凹基Ⅱ式と平基式の中に大型鏃がある程度含まれ、凸基Ⅰ・Ⅱ式では大型品が主体となる。畿内における弥生時代中期の大型鏃の主流は凸基Ⅱ式と有茎式であるが(文献5)、大中の湖南遺跡においては有茎式石鏃は未発達の様である。

守山市赤野井湾遺跡では、昭和63年度と平成元年度に発掘された北調査区から100点余りの石鏃が出土した(文献43)。すべて打製のものであり、磨製石鏃は出土していない。石鏃は遺物包含層出土であるため帰属時期を厳密には決定しがたいが、同一層位から出土している土器から判断して、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉頃までの時期幅に概ねおさま



第2図 安土町大中の湖南遺跡出土の打製石鎌 (S=1/3)

る資料と考えたい。全体として見れば平基式と凹基Ⅰ・Ⅱ式のもの为主体となっているが、長さが3cmを超え、重さ2g以上である大型品6点に限って見れば、凹基Ⅰ式1点、凹基Ⅱ式2点、凸基Ⅱ式1点、有茎式2点となる。有茎式2点は舌状の茎を持つ。大中の湖南遺跡では未発達であった有茎式の大型鍬が当遺跡では出土していることに注目しておきたい。

大津市南滋賀遺跡では、58-3地点の土坑SK01から弥生時代中期前葉～中葉の土器とともに石鍬2点が出土している(文献37)。平基式と有茎式のものであるが2点とも長さ3cmを超え、大型品と考えられるものである。

湖東地域の高地性集落である竜王町堤ヶ谷遺跡からは、22点の石鍬の出土が知られている(文献4)。土取り工事によって削平された中から採集された遺物群であるために帰属時期を確定しがたいが、出土土器から判断して弥生時代中期中葉を中心とする時期の資料としておきたい。図示された石鍬が22点中の8点しかないために全容は確認できないが、報文によれば凸基無茎式(3点)、凸基有茎式(4点)の中には大型化の傾向が見られ、重さ7.3gを量るものもある。ただし、これらの形式が占める比率はあまり大きくない。一方、平基無茎式(11点)、凹基無茎式(1点)、円基無茎式(3点)には小型のものが多いとされる。これまでに報告されている資料を見る限りでは実体が不明確ではあるが、当遺跡では石鍬の大型化が一定程度進んでいるとはいえ小型鍬の占める比率が高く、軍事的性格の強い高地性集落として大型鍬を多量に保有しているとは言いがたい状況であることは確かである。なお、堤ヶ谷遺跡では磨製石鍬の出土が確認されておらず、既述の大中の湖南遺跡や赤野井湾遺跡の資料と併せて考えると、弥生時代中期中葉までの滋賀県内の遺跡においては、磨製石鍬の出土はほとんど認められないようである。

以上の4遺跡の例から、弥生時代中期前葉～中葉頃には凹基Ⅰ・Ⅱ式、平基式、凸基Ⅰ・Ⅱ式、有茎式のすべての形式において大型化した打製石鍬が確認できる。大中の湖南遺跡の例からみて、有茎式の大型鍬はやや遅れて中期中葉頃に出現したものであろうか。しかし、堤ヶ谷遺跡の例のように小型鍬は依然として、かなりの比率を占めていたものと思わ

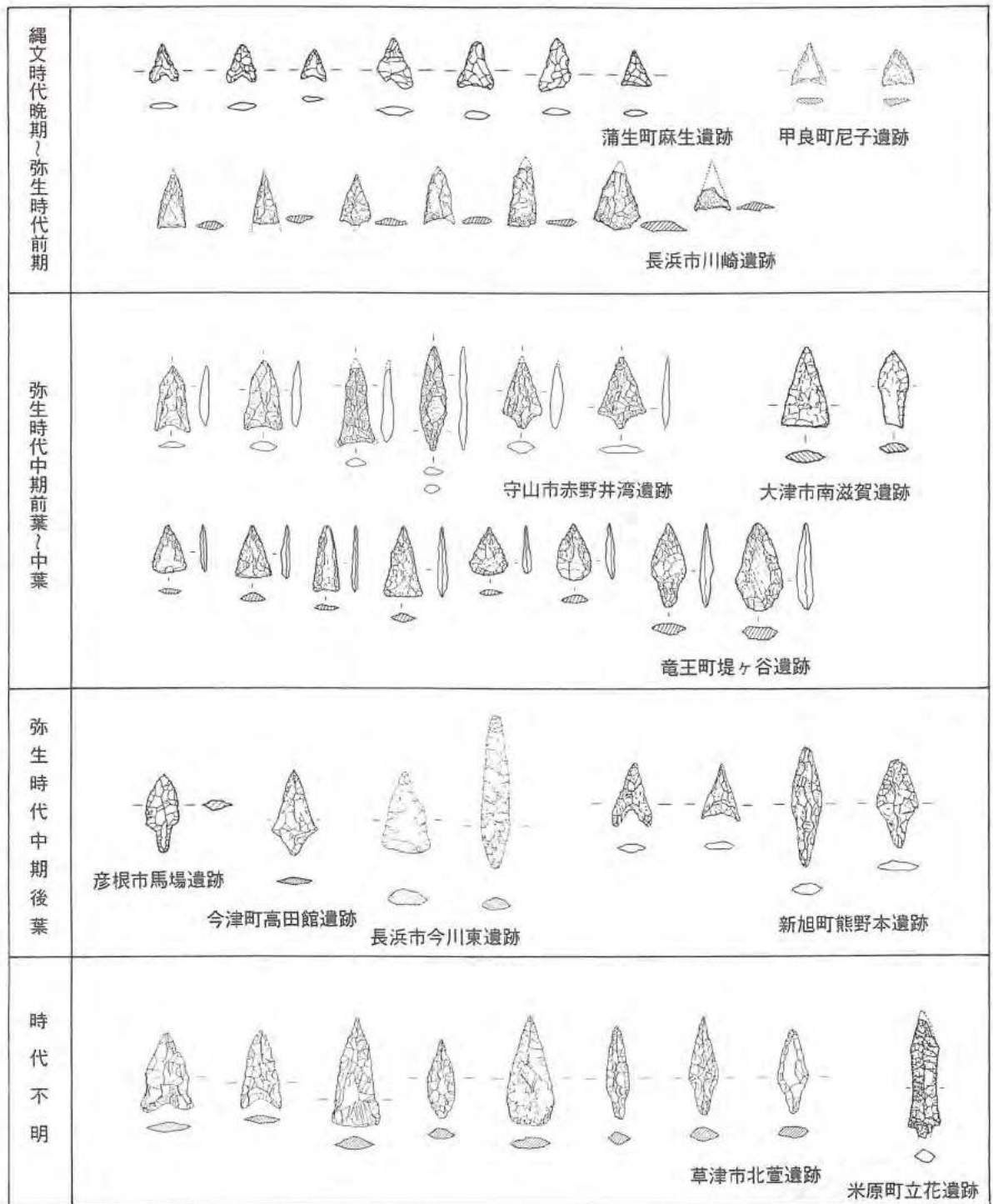
れる。

引き続き弥生時代中期後葉の様相を見ていきたいが、残念ながら当該時期の打製石鍬については、まとまった出土点数の報告例を見い出せない状況である。今後の調査報告に期待したいが、次節で触れる磨製石鍬がこの時期以降に出土が多く見られることと関連して、この段階に打製石鍬の出土点数が減少するためかも知れない。

中期後葉の打製石鍬について、断片的ながらいくつかの例を挙げておきたい。彦根市馬場遺跡のSR1-aから出土した有茎式石鍬は(文献31)、伴出土器から判断して弥生時代中期後葉のものと思なうるが、長さ3.7cm、重さ2.95gを量り、大型の部類に含まれるものである。今津町高田館遺跡では古墳時代後期の古墳周溝埋土から大型の有茎式石鍬1点が出土している(文献35)。調査区内の状況から推定して弥生時代中期後葉のものである可能性が高い。長浜市今川東遺跡では石鍬2点が出土しており(文献41)、いずれも重量5gを超える大型のものである。1点は凸基Ⅰ式の範疇に含まれるものであるが極めて長大であり、伴出する土器から判断して弥生時代中期後葉のものであろう。もう1点は平基式のもので、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の土器を出土する層位からの出土品である。

湖西地域の高地性集落である新旭町熊野本遺跡は、弥生時代中期中葉頃から後期にかけての遺跡であるが、遺跡の盛期は中期後葉から後期と思われる。現地説明会資料によれば石鍬は打製4点、磨製1点が紹介されている(文献21)。打製石鍬のうち2点が凹基Ⅰ式、凸基Ⅱ式と有茎式が各1点、磨製石鍬は有茎式のものである。凹基Ⅰ式のもの2点は長さ3cm以下で、他の3点は3cmを超える大型品である。このほか、鉄鍬が2点出土しており、これも有茎式のものようである。未報告資料であるため遺跡の詳細は明らかでなく、石鍬5点の帰属時期も明らかでないが、武器が鉄器化する移行過程の遺跡として重要である。

以上のように中期後葉前後のものと考えられる石鍬の様相を見てみると、断片的な資料ではあるが中期中葉頃までに比べて有茎式のものが目立ち、大型鍬の主体となるようである。その一方で、凹基Ⅰ・



第3図 滋賀県内出土の打製石鏃 (S=1/3)

Ⅱ式や平基式の大型鏃の出土例が減少するものであろう。また、小型の鏃の出土を確認できる事例が乏しく、出土量が減少していることがうかがえる。

以下は帰属時期を特定しがたい資料ではあるが、滋賀県内における大型打製石鏃の様相をもう少し見とおきたい。

長浜市鴨田遺跡の国道8号線長浜バイパス建設工

事に伴う発掘調査においては、弥生時代中期から古墳時代中期にかけての遺物が出土している(文献24)。報告書によれば磨製石鏃4点、打製石鏃28点が出土したとされるが、打製石鏃は図化されておらず計測値が明らかでなかった。県立安土城考古博物館に収蔵されている打製石鏃17点を実見して計測したところ、全長3cm以上で重量2gを超えることを確認で

きるものが10点と過半数を占める。これら10点の大型鎌の形態は平基式と有茎式が各3点、凸基Ⅰ式と凹基Ⅱ式が各2点と多様である。

河川改修に伴う草津市北萱遺跡の発掘調査においては打製石鎌228点と磨製石鎌4点の出土が報告されている(文献39)。雑多な時代の土器を含む遺物包含層からの出土であるために石鎌の帰属時期は明らかでない。全長3cm、重量2gを超える大型の打製石鎌は17点存在する。そのうち有茎式のもの7点と最も多いが、図化されたものは一部である。そのほか、凹基Ⅰ式、平基式、凸基Ⅰ式、凸基Ⅱ式の各形式が確認できる。有茎式の大型鎌には細長い形状のものが多いようである。

米原町立花遺跡では9点の打製石鎌と2点の磨製石鎌が出土している(文献16)。調査区からは縄文時代早期から古墳時代にいたる多様な時代の土器が出土しており、石鎌の帰属時期は決定しがたい。報告書には石鎌の重量についての記載はないので、長さのみから判断すれば、11点の石鎌の中で大型鎌と見なされるのは有茎式の1点のみである。東海地方において出土例が見られる五角形鎌の系譜を引く長大なものであり、使用石材が岐阜県産の下呂石である点も注目される。

これらの遺跡の打製石鎌の様相を見ると、有茎式のもの大型鎌の中で中心的な位置を占めていることがうかがえる。これまで見てきたように、滋賀県の弥生時代中期においては大型化した打製石鎌が確実に認められるのであるが、大中の湖南遺跡の資料を見る限りでは、中期前葉には大型鎌の主体は凸基Ⅰ・Ⅱ式と平基式、凹基Ⅱ式であった。しかし、続く中期中葉には有茎式の大型鎌が現れ、中期後葉にかけて大型打製石鎌の主流となるようである。

以上の傾向を畿内地域と比較してみたい。松木武彦によれば畿内南部では前期末に凹基式と凸基Ⅱ式の一部が大型化し、中期には有茎式のものにこれに加わって、やがて有茎式と凸基Ⅱ式が大型石鎌の主流となるとする(文献5)。また、畿内北部などの周辺部では大型鎌が少なく、有茎鎌の茎部の成形技法に崩れが見られ、有茎式・凸基Ⅱ式の比率が少ない傾向が指摘されている。畿内の外縁部にあたる滋賀県においては前期末の状況は明確でないが、中期中

葉には凸基Ⅱ式などが大型化している点では畿内南部の状況に比較的近い。中期になって大型鎌の主体が有茎式のものに変化していく状況も概ね合致しているが、現在知られている資料を見る限りでは凸基Ⅱ式のもの占める比率が低い印象を受ける。

4. 磨製石鎌について

磨製石鎌は畿内南部では出土が比較的少ないのに対して、畿内北部に目立った存在として佐原真によって注目された(文献2)。滋賀県における磨製石鎌は、湖東・湖北地域に無茎式、湖西・湖南地域に有茎式のものが多いという福岡澄男による先見的な指摘(文献25)を踏まえて、進藤武は1992年に滋賀県内の磨製石鎌を31例確認できるとし、福岡が示した地域色をさらに細かく検証している(文献6)。また、進藤は磨製石鎌を中期後葉に出現して後期には減少する存在としている。本稿では、その後の報告例など管見に触れた資料を加えて、計測値が確認できる26遺跡56例を表1に示した。これを基にして滋賀県における磨製石鎌の様相を見ていきたい。

磨製石鎌についても、打製石鎌と同様に遺構からの良好な出土例が乏しいために時期を特定しがたい資料が多いが、進藤が述べるように磨製石鎌は弥生時代中期後葉に出現して後期にかけて存在する遺物であることがおおよそ窺える。長浜市鴨田遺跡では、数次の発掘調査によって11点の磨製石鎌の出土が報告されており、表1に示した限りにおいては1遺跡からの出土点数としては最も多い。ただし、国道8号線バイパス工事に伴う発掘調査においては打製石鎌28点に比べて磨製石鎌はわずか4点しか出土が報告されておらず(文献24)、この地点の報告例を見る限りでは打製石鎌に比べて磨製石鎌が占める比率はかなり小さい。また、大津市大伴遺跡においては磨製石鎌が6点確認されているのに対して、同じ調査区内からの打製石鎌の出土は12点ある(文献30・32)。ただし、報告書においても述べられているとおり、縄文時代に帰属すると考えられる小型の打製石鎌も含まれているため、弥生時代中期後葉から後期にかけての磨製石鎌と打製石鎌の構成比率を明らかにすることは困難である。

滋賀県における調査報告例を見る限り、石鎌が磨

	遺跡名	所在地	出土地点	時代	長さcm	重量g	石材	形式	備考	文献
1	穴太	大津市	VD区2号溝		(4.5)		ホルンフェルス	有茎式		25
2	滋賀里	大津市	ⅢE区包含層	中～後期?	(4.7)		ホルンフェルス	有茎式		25
3	錦織	大津市	ⅠE区3号溝	～V	5.2		ホルンフェルス	有茎式		25
4	錦織	大津市	ⅠF区3号溝	～V	5.5		ホルンフェルス	有茎式		25
5	大伴	大津市	SB5	Ⅳ～Ⅴ	(2.6)	(2.0)	硬質頁岩	有茎式		30
6	大伴	大津市	SD6		(3.9)	(3.3)	硬質頁岩	有茎式		30
7	大伴	大津市	整地層		3.1	0.8	硬質頁岩	凸基Ⅰ式		30
8	大伴	大津市	SK143		(4.2)	(2.4)	硬質頁岩	?		30
9	大伴	大津市	SK130	Ⅳ?	(4.7)	(2.9)	硬質頁岩	?		30
10	大伴	大津市	土壙3		(2.9)		安山岩系	?		32
11	北萱	草津市	包含層		(2.3)	(1.0)	頁岩	凸基Ⅰ?		39
12	北萱	草津市	包含層		3.7	2.5		平基式		39
13	北萱	草津市	包含層		5.3	4.0	頁岩	有茎式		39
14	北萱	草津市	包含層		3.3	1.9		凸基Ⅱ式		39
15	御倉	草津市	A区SK1		(3.6)			平基式	有孔A	14
16	襖	草津市	E区柱穴掘り方		(2.8)			?		12
17	中沢	栗東町	SD5	Ⅳ	(4.2)			?		9
18	中沢	栗東町	SD7	Ⅴ～	(4.0)			有茎式		9
19	吉身西	守山市	第8号墓	Ⅳ後半?	3.3			平基式		15
20	吉身西	守山市	第21号墓	Ⅳ後半?	4.7			平基式	有孔A	15
21	吉身西	守山市	SH1	Ⅴ前半	2.3			平基式	有孔B	15
22	下之郷	守山市	SK5		6.6		粘板岩	凸基Ⅰ式		18
23	下之郷	守山市		Ⅳ?	4.5			凸基Ⅱ式		20
24	服部	守山市	遺構面		3.7		粘板岩	平基式	有孔B	10
25	服部	守山市	SH125	Ⅳ末～Ⅴ初	(1.9)			?		10
26	服部	守山市	SH040	Ⅳ	(2.2)			?	有孔A	10
27	服部	守山市			(3.9)			?		10
28	野々宮	野洲町	竪穴住居	Ⅴ	3.7			凹基Ⅰ式		9
29	八夫	中主町	SD2201	Ⅳ～Ⅴ	(4.1)	(2.5)	珪質頁岩	凸基Ⅰ式		11
30	湯ノ部	中主町	T22包含層	Ⅳ～	4.2			平基式		42
31	湯ノ部	中主町	T25包含層	Ⅳ～	4.4			平基式		42
32	湯ノ部	中主町	T25 SD2532	Ⅳ	(4.8)			有茎式		42
33	市子	蒲生町	第1地区表採		3.4	3.0	頁岩	平基式		17
34	内池	日野町	JトレンチSK3	Ⅳ	2.6	1.4	粘板岩系	平基式		29
35	柿堂	能登川町	SR1	～Ⅴ	3.8			凸基Ⅰ式		13
36	鴨田	長浜市		中期～	5.0	6.7	粘板岩	平基式		24
37	鴨田	長浜市		中期～	5.7	5.0	粘板岩	平基式		24
38	鴨田	長浜市		中期～	3.0	2.1	粘板岩	平基式		24
39	鴨田	長浜市		中期～	3.8	(1.8)	粘板岩	平基式		24
40	鴨田	長浜市	SD5下層	Ⅴ～	3.5			平基式		36
41	鴨田	長浜市	SX3	古墳前期?	4.9	4.2	粘板岩	平基式		38
42	鴨田	長浜市	環濠?	中～後期	2.2			平基式		9
43	鴨田	長浜市	環濠?	中～後期	2.9			平基式		9
44	鴨田	長浜市	環濠?	中～後期	3.3			平基式	有孔B	9
45	鴨田	長浜市	環濠?	中～後期	4.7			有茎式		9
46	鴨田	長浜市	環濠?	中～後期	2.9			平基式		9
47	大塚	長浜市	第2調査区SR001	中期～	4.8		頁岩	有茎式		19
48	立花	米原町	包含層		2.6		粘板岩	平基式		16
49	立花	米原町	包含層		3.0		粘板岩	平基式		16
50	井口	高月町			(5.8)			平基式		27
51	桜内	余呉町			3.0			平基式	有孔A	34
52	高田館	今津町	北部地区	Ⅳ?	(3.8)		アジノール板岩	凸基Ⅰ式		35
53	弘川	今津町	落ち込み	中期?	3.2	2.2	アジノール板岩	平基式		28
54	弘川	今津町	溝2	中期	(6.6)	(6.4)	アジノール板岩	凸基Ⅰ式		28
55	美園	新旭町	B・C38地区包含層		3.8	2.8	粘板岩	平基式		26
56	熊野本	新旭町		中期～後期	4.4			有茎式		21

*有孔Aは穿孔が貫通するもの、有孔Bは貫通しないもの

表1 滋賀県内出土の磨製石鏃

製のものだけで構成されることが確認できる遺跡は現段階では存在しない。遺跡の存続期間のある時点においては磨製石鏃のみを製作して使用していた可能性はあるが、総じて見れば弥生時代中期後葉以降、打製石鏃と磨製石鏃は同一集落内において併用されていたものであろう。ただし、守山市の吉身西遺跡と服部遺跡では打製石鏃の出土が少なく、中期末頃には磨製石鏃の出土点数が打製石鏃を上回っていた可能性がある。同じく守山市内の遺跡である下之郷遺跡と合わせて、地域性を示すものかもしれない。⁽²⁾

磨製石鏃の全長についての計測値を見ると、打製石鏃で用いた3cmの境界値を上回るものが41点あり、ほぼ全長を知りうる36点に限って言えば27点(75%)を占める。ただし、磨製石鏃には比較的薄い作りのものが多いため、大伴遺跡例のように3cmを超える全長を測るものでも重量が1gに満たないものもあることは注意を要する。報告書に重量についての記載のあるものが乏しいため、大型鏃と見なすべきか否か躊躇する事例が少なからずあるが、重量が判明する20点の中で、⁽³⁾2gの境界値を上回るものが14点(70%)を占め、磨製石鏃は打製石鏃における大型化の流れを引いた大型鏃が主流であることは窺える。

形状について見ると、基部の形状が確認できる47点のうちで平基式に属するものが26点(55%)を占めて最も多い。これに次ぐのが有茎式12点(26%)、凸基Ⅰ式6点(13%)である。ただし、凸基Ⅰ式と平基式のいずれにすべきか迷う形状のものが数点存在している。凹基式のものには野洲町野々宮遺跡(凹基Ⅰ式)の1点のみと極めて少ない。凸基Ⅱ式のものも2点のみと少ない。

既に見たように、弥生時代中期後葉の大型打製石鏃の形状は有茎式が主体であり、平基式のものはいくつか少ない。磨製石鏃と打製石鏃では形態の傾向が大きく異なっているのであり、磨製石鏃が打製石鏃の形態を模したものとは言えない状況である。滋賀県内出土の銅鏃においても有茎式のものが多いが、無茎式のものも少なく(文献3)、磨製石鏃の形態をいかなる系譜に位置付けるべきかは現在のところ定見を持たない。今後、周辺府県の様相と比較検討していきたい。なお、進藤武は中期後葉に平基式の磨製石鏃が出現し、中期末から後期にかけて有茎式・凹基式のもの

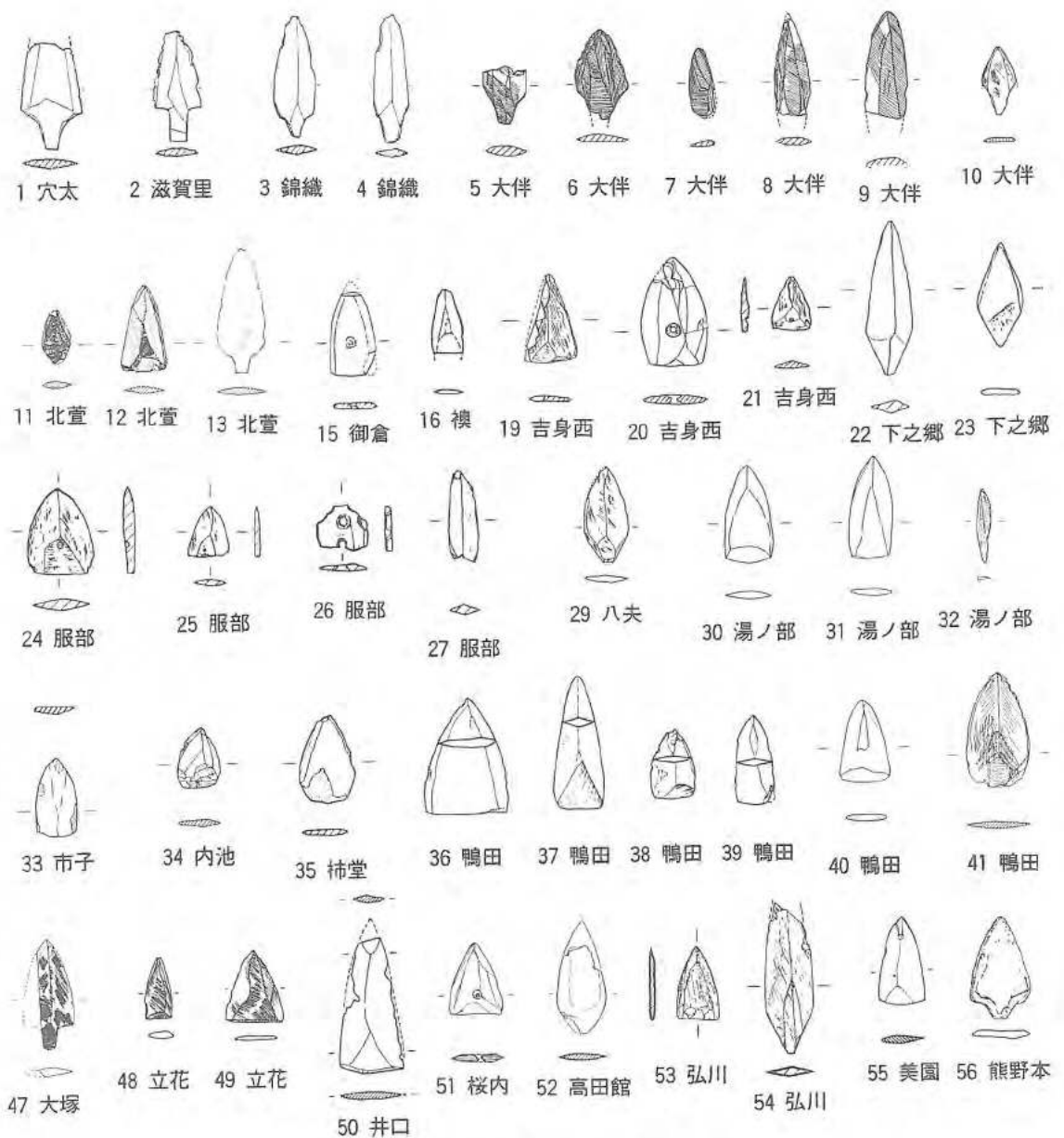
に移り変わる可能性を指摘しているが(文献6)、その後報告された資料によっても進藤の指摘の当否は十分に検証できない状況である。進藤は弥生時代後期には磨製石鏃の出土は減少するとも述べるが、時期を確定できる資料に乏しい現段階では、磨製石鏃の衰退から消滅への様相を十分に把握できない。

ところで、打製石鏃には見られず磨製石鏃に特徴的な形態として、有孔のものがある。草津市御倉遺跡など4例に穿孔を施したもの(有孔A)が認められ、守山市吉身西遺跡など3例においては穿孔が貫通しないもの(有孔B)が存在する。磨製石鏃への穿孔が中部・関東地方において類例が多いことは、佐原真が指摘しているとおりのことである(文献1)。滋賀県内の磨製石鏃に見られる穿孔も、中部・関東地方からの系譜を引くものと考えられる。しかし、未貫通のものが認められることは、未製品と考えるのではなく、有孔磨製石鏃の分布圏の縁辺に位置する滋賀県では、石鏃を矢柄に固定するための穿孔の本来の機能が十分に理解されずに形骸化していたことを示すものとしておきたい。

5. まとめにかえて

以上のように、滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷は、時期を詳細に特定できる資料に乏しいものの、弥生時代中期前葉頃には凸基Ⅰ・Ⅱ式や平基式、凹基Ⅱ式のものに大型化の傾向が確認でき、中期中葉頃に有茎式の大型鏃が出現して中期後葉には大型鏃の主体になっていく。こういった傾向は畿内南部などと若干異なる点はあるものの、概ね歩調を合わせるものといえよう。一方、中期後葉以降には磨製石鏃が多く出土するようになり、打製石鏃とは形態的に異なる傾向が認められるものの、大型鏃として実用の武器に用いられたものと思われる。遺跡内における打製石鏃と磨製石鏃の構成比について検討できる事例は乏しいが、中期末頃には磨製石鏃が打製石鏃を数量的に上回る遺跡が認められる。

松木武彦は近畿北部における磨製石鏃の存在意義について、畿内内部での戦乱による緊張関係に伴う打製石鏃用の石材サヌカイトの流通不足の問題を考えている(文献5)。打製石鏃と磨製石鏃の構成比の変化を明らかにできる資料に乏しい現段階において



第4図 滋賀県内出土の磨製石鎌 (S=1/3)

はこの問題には触れることはできないが、この点を考える際には磨製石鎌の使用石材と生産・流通の問題についても十分に検討する必要があるだろう。

打製石鎌と磨製石鎌は弥生時代後期には減少傾向をたどって、やがて消滅していくものと思われるが、現時点ではそれを論証する材料は十分でなく、本稿では全く触れることができなかつた。銅鎌と鉄鎌の変遷にも視野を広げながら今後検討すべき課題である。

以上のように、資料不足と筆者の力量不足のため

に論じ残した問題があまりにも多いが、現段階における素描として提出した本稿が、滋賀県における今後の石鎌の調査報告や研究活動にあたって、わずかでも参考になれば幸いである。なお、遺物の実見と資料収集にあたっては、守山市立埋蔵文化財センター、県立安土城考古博物館の皆様には便宜をはかっていただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

註

- (1) 県立安土城考古博物館に収蔵されている国道8号線長浜バイパス建設工事に伴う発掘調査の出土石器を、実見したところ、打製石鏃17点の他に磨製石鏃7点があることを確認した。報告書によれば磨製石鏃の出土は4点になっており、打製石鏃と磨製石鏃の出土点数についての報告書の記述は全面的には信用できない。
- (2) 守山市下之郷遺跡については、本稿で取り上げた磨製石鏃は2点のみであるが、速報展(特別展『守山の歴史を掘る2』守山市立埋蔵文化財センター 1997年)などで遺物を実見したところ、数次にわたる発掘調査によって多くの磨製石鏃が出土しており、打製石鏃の出土点数を上回るようである。
- (3) 磨製石鏃の重量のうち、長浜市鴨田遺跡出土の36~39については筆者の計量に基づくものである。

文献

- 1. 佐原眞ほか『紫雲出』(香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964年)
- 2. 佐原眞『大和川と淀川』(『古代の日本』第5巻 近畿角川書店 1970年)
- 3. 田中勝弘『弥生時代の銅鏃について』(『滋賀考古学論叢』第1集 1981年)
- 4. 岩崎直也『湖東における高地性集落の調査』(『滋賀文化財だより』No.68 御滋賀県文化財保護協会 1982年)
- 5. 松木武彦『弥生時代の石製武器の発達と地域性一とくに打製石鏃について』(『考古学研究』35-4 考古学研究会 1989年)
- 6. 進藤武『近江における弥生石器の消長』(『滋賀考古』第7号 滋賀考古学研究会 1992年)
- 7. 村田幸子『縄文晩期から弥生前期における近江の石器一石鏃の地域性を中心に一』(『近江歴史・考古論集』畑中誠治教授退官記念会 1996年)
- 8. 小竹森直子『館藏品資料調査報告 大中の湖南遺跡出土の石器類について一補遺編一』(『紀要』第4号 滋賀県立安土城考古博物館 1996年)
- 9. 『第34回埋蔵文化財研究集會資料 弥生時代の石器一その始まりと終わり一』(埋蔵文化財研究会関西世話人会 1992年)
- 10. 『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会・守山市教育委員会 1986年)
- 11. 『昭和60年度中主町内遺跡発掘調査年報』(中主町教育委員会 1986年)
- 12. 『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(I)』(草津市教育委員会 1986年)
- 13. 『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第8集』(能登川町教育委員会 1987年)

- 14. 『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(Ⅱ)』(草津市教育委員会 1988年)
- 15. 『吉身西遺跡発掘調査報告書』(守山市教育委員会 1988年)
- 16. 『立花遺跡発掘調査報告書』(米原町教育委員会 1988年)
- 17. 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ一市子遺跡一』(蒲生町教育委員会 1990年)
- 18. 『守山市文化財調査報告書 第37冊』(守山市教育委員会 1990年)
- 19. 『長浜市埋蔵文化財調査資料第12集 大塚遺跡』(長浜市教育委員会 1995年)
- 20. 『現地説明会資料一第23次発掘調査の速報一』(守山市教育委員会 1996年)
- 21. 『平成9年度 熊野本遺跡発掘調査一現地説明会資料一』(新旭町教育委員会 1997年)
- 22. 『大中の湖南遺跡調査概要』(滋賀県教育委員会 1967年)
- 23. 『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 1971年)
- 24. 『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』(滋賀県教育委員会 1973年)
- 25. 『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 1973年)
- 26. 『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1975年)
- 27. 『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1981年)
- 28. 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ一3』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1981年)
- 29. 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ一3』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1982年)
- 30. 『大伴遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1983年)
- 31. 『馬場遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1984年)
- 32. 『大津市大伴遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1986年)
- 33. 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ一5』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1987年)
- 34. 『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1989年)
- 35. 『一般国道161号(湖北バイパス)建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書 高田館遺跡』(滋賀県教育委員会・御滋賀県文化財保護協会 1991年)
- 36. 『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(滋賀県教育委員会・御滋

- 賀県文化財保護協会 1992年)
37. 『南滋賀遺跡』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1993年)
 38. 『鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1994年)
 39. 『北萱遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1994年)
 40. 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X X I - 3 在士北・尼子遺跡』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1994年)
 41. 『県営灌漑排水事業関連遺跡発掘調査報告書 X I - 1 今川東遺跡』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1995年)
 42. 『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅱ) 湯ノ部遺跡発掘調査報告書 I』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1995年)
 43. 『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書 2 赤野井湾遺跡』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1998年)

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年3月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は2段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。 (K. O)

平成10年3月

紀要第11号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923

K

滋賀県文化財
保護協会蔵書印

440